

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふなとよ「風」

第二十七号（二〇〇八年八月）

風に吹かれて（ ）

白井啓治

『熱波に追われて

独りとぼとぼ風もとぼとぼ

雑木林』

『今日も行き暮れて鴉の一片』

最近、詠んだ一行文を読み返すとき、怠惰で

厭世的な臭いを感じ、スランプなのだろうか、
と思ってしまう。この二つの一行文は、何れも
恋歌といえは恋歌であるが、何とも投げやりな
感じがしてならない。このような文を掲載する
のはどうか、とは思ったが、この原稿のため
に詠んだ文だから、そのまま載せることにした。

怠惰で厭世的な臭い。それは女々しく、しみ
つたれた未練な自己愛、とでも表現した方が解
り易いだろうか。詠んだ文そのものは恋歌であ
るが、その中身は失恋の歌である。失恋時の心
の中は、所詮は未練な怨み節だから、大概の失
恋の歌は愉快なものにはならない。

しかし、私の感覚としては、失恋も人生の愉
快でなければならぬと思っているから、投げ
やりで厭世的な未練な臭いは感心しない。哀し
くても愉快でなければいけない。

私は、それこそ誰彼構わず「恋をしる」と言
っている。恋することの愉快とは、自分勝手に、

一人よがりの希望をドンドン膨らませていくこ
とだといえる。だから当然そこには互いに好き
合い、相手のことだけを考え思っているようで
あっても、それぞれの勝手な希望が膨らんでく
るから失恋も生まれる。失恋だから心も痛くな
る。しかし、その痛さとは所詮愉快な痛さだと
いえる。

詠んだ二つの一行文も、人生の愉快としての
心の痛さが詠われていれば希望のある文といえ
るのだが、怠惰で厭世的臭気が先に聞こえてく
るのは実に希望の見えないことである。

小林一茶のように「森羅万象みな句にしてや
った」とは、理屈としては理解し、そうありた
いとは思っているのだが、全てを人生の愉快と
達観し、その通りに文を紡ぐというのは実に難
しいことである。

七月十三日のこと。美浦村の市民劇団「宙」
の公演に出かけてきた。普段は、お誘いを受け
ても、市民劇団のような舞台には殆ど行くこと
はない。それは、観劇する前から情熱だけの押
し付けしかない事が分かるからだ。だがそれは、
仕方のないことではある。

しかし、今回美浦村に出かけてみて、石岡に
は期待することが難しい希望的な愉快のあるこ

とを知った。

有志が集まった市民劇団であるから、団員達
の情熱は当たり前のこと。それが大きな押し付
けになっても構わないと思っている。もし
その押し付け的情熱がなかったら、過激な言い
方ではあるが、それこそ観るに値するものはな
いと思う。

私が、希望的愉快を思ったのは、美浦村の人
たちの舞台への一生懸命な応援参加であった。
団員と一緒に舞台を創っているという感覚を持
った観客が大多数を占めていたことであつた。
これは、文化の原点がしっかりとそこに在るこ
とを示すものである。

残念なことであるが、正直断言させてもら
うと、この石岡にはその文化の原点になる暮らし
の心が見えてこない。一緒に観にいった兼平さ
んも、市民の舞台を一体となって創りあげてい
る、という気迫のようなものを感じ、驚かれて
いた。だから演劇表現については色々問題点多
多いが、それを市民全体で帳消しにしている。

この事は、宙の代表で演出をやられている市
川紀行氏のお力であろうと思う。今の石岡では
決して感じ取ることの出来ない希望的愉快であ
る。

劇団「宙」は、もともと地域の暮らしの物語
を演じてきたそうであるが、私の個人的にはそ
の出発点に戻していただけることを期待するも
のである。

霞ヶ浦を中心とした常世の国の南部である
「信太」からと北部対岸の「行方」「鹿島」「茨

城」方面から、丁度、武借間命と黒坂命が霞ヶ浦沿岸の原住民・蝦夷を滅ぼすが如く、千五百年、いや千七百年後なのであるうか、平成の世に今度は希望の文化進攻が始まると、愉快、愉快と思うのであるが。

歴史ガイドに同行して(4) 兼平ちえこ

四月十二日に行なわれた「霞ヶ浦・常陸風土記を歩く会」の皆さんへのご案内コースを紹介してきましたが、今回はその最終コース⑩石岡城外城跡(後半)⑪小目井 ⑫月天宮 ⑬愛宕神社・景清塚です。

ご案内から少し日が経ったので、先日、蒸し暑い中、もう一度出かけてみました。

⑩石岡城外城跡

石岡城に関しては、郷土史研究家の方々の様々な説がありますが、昭和五十五年(一九八〇)に外城遺跡発掘調査が行なわれ、瓦等、中世の遺物が出土し、城跡であったらしい事が確認されています。今後、第二次、第3次の発掘調査が行なわれ、中世のロマンが解き明かされることを願いながら、今回は、昭和六十年三月付の説明板に添ってご案内しましょう。

建保二年(一一二四)常陸大掾を継承して、常陸国衙において政務をとっていた大掾資幹は、鎌倉幕府から府中の地頭職を与えられ、この地に居館を構えた事が石岡城の起こりと言われている。

その後、大掾氏の拠点として城郭も整備され「税所文書」には南北朝動乱期の大掾高幹の居城として「府中石岡城」の名前が見える。高幹の子、詮国の代に至り、大掾氏は常陸国衙を拡張して府中城を築き本拠をそこに移した為、石岡城は「外城」と呼ばれたという。近世後期に書かれた地誌類には、大掾氏が府中城に移った後の「外城」の城主として、石岡某、札掛兵部之助、田島大学などの名前が見え、天正一八年(一五九〇)の大掾氏滅亡とともに外城も廃城となつている。現在は、かつての城主であった札掛氏をまつる札掛神社と堀、土塁の一部を残すのみである。(説明板より)

札掛氏をまつる札掛神社は、札掛大明神と呼ばれ、祭神は札掛民部佑氏俊。札掛氏は代々この外城の地に関わりをもつていて氏俊の代に外城の城主であった。

天正一八年(一五九〇)大掾浄幹(現在の石岡小学校内、府中城にて)は、佐竹義宣の大軍を迎え、石岡及びその周辺に戦った。この時外城を守っていた氏俊は壮烈な戦死を遂げ、城は焼け落ちた。十二月二十三日〜二十八日の事である。札掛氏の一類である岡田家をはじめ、周辺の人達は大変、その死を嘆き、一社を建てて祭った。これが札掛大明神である。

隣りに鎮座する岡田稲荷神社については、祭神は、宇賀御魂神。もとは外城の鬼門除として祭られた。そんなわけで館宮稲荷大明神ともいわれた。岡田稲荷神社と改めたのは、天保六年(一八三五)である。その頃から岡田家が祠守

(しもり)をしている。

南北朝時代の内乱での霊を一心に慰め、見守っている札掛大明神さまは、現在ではビニールハウスの並ぶ畑地と宅地。西側、南側は緩斜面になっている舌状台地の丘陵地を前にしています。

西北方面の小高くなっている鐘付堂であったという辺り。フンダテ(古館)といわれている城内。南側は、カンドリと呼ばれ、大掾家の軍神、守護神としての香取神宮に由来するという。「香取はカンドリ(楫取)の約で上古においては船人を統率する人の地をいう。下総国の香取神社は神代下紀の東國のカトリ(楫取)の地」という。(石岡の地名「ひたちのみやこ千三百年の物語」より)

広大な城跡を右手にして、宅地の点在する曲がりくねった道を南側に下りていく。前方に恋瀬川の土手が広がる。残念ながら、流れは目にする事が出来ない。可憐なピンクの花を付けるたばこ畑。突如、田園地帯を遮るコンクリートの橋桁(バイパス道路建設用)。丘の上の外城の堅固な守りを示すかのように孤を描いて続く道。筑波山がより近く広がる。青田が揺れる。恋瀬橋を架ける六号国道は相変わらず多忙な車の往来。

⑫小目井

約八〇メートル辺りの南西崖下に古井戸がある。これを小目井と呼んで、府中六井の一つとして豊かな水量と良質の水を湧出していたそうですが、現在では、ほとんど涸れてしまってい

る。「府中雜記」によると「税所、健児所（ここにしよ：治安、防衛に関する機能を持つ官職）等六人、祭事を行う時、この六井にて垢離（こり）を為す（なす）」と記されている。

六人衆の満々とした冷水を浴びる様子を想い描きながら約二十メートル先を右へ上る。右側は古城の西側の緩斜面になっている。

緩やかな曲がり坂を三百メートル位進むと「茨城郡衙・石岡城跡へ二〇〇メートルの案内ポールのある（右を指している）丁字路。右側に目を移す。東、南、西側と自然の地形を利用した、それぞれの外堀の跡。内堀は、丁度ビルハウスの辺りに明瞭に目にするのが出来た事を確認しながら、石岡市史（上）の文中「風光の美、誠に王者の居館に応しい」に納得し、先人の勇姿に拍手を送り、懸命に生きた証に心熱くしながら、丁字路を左へ、月天宮に向かいます。

⑬ 月天宮

まもなく右側に桜木等、こんもりとした木々の一角に月天宮。本殿の後に奥の宮。重厚さと荘厳さも感じられる。祭神は天照大神の弟、月読尊。国府時代、国分寺のあるところ日天、月天、星の宮の三社あり。日天宮（祭神は天照大神、太陽即ち日の神）は、国府七丁目に現存。星の宮（祭神、天香々背男命、北極星の位置に建てられた）は、昭和二十年頃までは府中五丁目に現存していたそうですが、惜しくも建造物は解体され、総社宮の境内に移設されているそうです。太陽崇拜はこの民族も共通であり、

我達の祖先も例外ではなく、日、月、星を神として信仰しました。石岡では府中三光の宮と称するようになった。

⑭ 愛宕神社、景清塚

月天宮の脇の細い道を進むと高浜街道に出る。高浜方面に向かって五十メートル位先を左に入る。間もなく真新しい貝地町公民館と以前会報二十五号で紹介しました、きんちやく石こと茨城廃寺、五重塔の露磐のレプリカが、威光を放っていました。貝地の皆さんの歴史に対する意識の高さが伺われました。

公民館の隣地の塚が景清塚といわれ、墳上に愛宕神社と平景清公之霊地の碑があります。景清は桓武天皇の血を引く高望王の子孫で、この地は景清山、景清屋敷と呼ばれている。

寿永年間（一一八三）平維盛に従って屋島合戦に源氏的美尾谷十郎国俊と綴引の力競べをして、その剛勇をうたわれた。また、扇の的を射た源氏の那須与一と共に屋島合戦の双壁を飾ったが、平家滅亡の後、源頼朝に従った。後に常陸国守護八田知家に預けられたが、食を断ち、建久七年三月七日に命を終えた。（石岡の歴史と文化より）体が大きく力が強かったので悪七兵衛景清とも称されていた。「悪」とは、性質や行動が激しい、勇猛である、剛毅であることを意味するもので、愛宕神社をもつて勇敢な景清の霊を慰めている、と金刀比羅神社の宮司さんが話されています。

如何でしたでしょうか。四ヶ月に亘り紹介してまいりました高浜、北根本、田島、貝地地区

補聴器専門店いしおか補聴器

補聴器は、聞こえれば良いというものではありません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談下さい。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。お気軽に、お立ち寄りください。

（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

石岡市石岡 2 1 5 8 6

電話 0 2 9 9 - 2 4 - 3 8 8 1

の石岡歴史めぐりコース。皆様にも健康増進のウォーキングと合わせ、石岡の歴史を肌で感じて頂きますことをお勧めいたします。次回も五月に行なわれまして旧石岡市内の寺社を中心とした歴史めぐりを紹介したいと思えます。

※参考資料 石岡市史上巻

揺れる谷津田 ふるさとに恋して
見つめられて ユリの花 ちえこ

今、その地に行つて聞いてみても殆どの人は知らないと言う。女池に雌の竜が棲んでいたという言い伝えのことは。

私とその言い伝えを聞いたのは、もう二十年も前のことである。年老いた漁師が霞ヶ浦を眺めながら、

「昔は良かった。魚がいっぱいいて、ここらも勢いがあつた」

と昔を懐かしむように話しをしてくれた。竜の話は、その漁師がまだ子供だった頃に、爺さんから聞いたのだという。

「女池には雌の竜が棲んで居たんだと。向こう場の男池にはな、雄の竜が棲んでいたんだそうだ。雌の竜と雄の竜が仲良く縄なうように縄れ合つて沖の方へ泳いで行ったのを何人も人が見たんだと。夜、向こう場の台から雄の竜が呼ぶと、こつちの台から雌の竜が答えて飛んでいったんだと」

二十年程前に、物知りだという年老いたその漁師に一度だけ聞いた話である。その後土地の誰からも竜の話の聞いたことがないので、その頃から既に人の口に伝えられてはいなかったのだらう。

物語が語り継がれていくというのは、その物語がそこに暮らす者達にとつて必要のあるものだから、大切に次の世代に申し送りされてきたのだらうと思う。そのように考えると、もう知る人が殆どいないという事は、竜の話には伝え残す意味も価値もなくなつてしまつた、と考え

ることが現実的なのかもしれない。

しかし、その考えには抗いたい気持ちがいっぱいである。兎に角、語り伝えられてきた粗筋だけでも残しておけば、誰かがそこに何時か新しい価値を創造してくれるに違いないと。

今、この里には竜が変わつて何が暮らしを伝えるための主題物になっているのだろうか。そんなことを考えながら、竜が棲んでいたと伝えられていた女池、男池を改めて訪ね、周囲を見直してみた。

木々の茂る台地。そこから湧き出る清水を沼が貯え、田畑を潤し湖に流れ落ちていく。この地の豊かさを改めて感じ、考えさせられた。この豊かな大地に生活が根付き、その伝えるべき暮らしの知恵として沢山の物語が産まれてきた。竜の話もその中の一つである。

抗いようのない大自然の営みの中で、大地の実りと海の恵みのバランスが常に崩れる中で人々は小さな力を寄せ集め、暮らしを創つてきた。この豊かな自然の中で、恐れられ、屹立していたのはそこに足を踏み入れた時、一瞬の油断も許さなかつた毒蛇であつたであらう。小さな毒蛇の力は人々の恐れと同時に敬いの中核にあつたに違いない。小さな毒蛇は豊かな大地を支える水の神となつた。

人知の及ばぬ偉大な大自然の営みに即すように蛇は大神（大蛇）となり、そして竜になつていったのかもしれない。

それにしても夫婦竜ではなく、男竜と女竜がいてそれが互いに呼び合つて、愛情の交換に霞

ヶ浦に泳ぎ出るといふ、言い伝えは実に悩ましいと言えぬ物語である。おそらくこれは常陸国風土記にもある嬬歌（かがい）に通じるのではないだらうか。

古代では、男女の営みも産霊（むすび）の力と考えられ、豊作を祈願するものであつた。そのことを考えると、男竜女竜の言い伝えも男女の悩ましい話であつても不思議ではないし、そうでなければならぬのかもしれない。

民話の世界を離れた下世話な世界になつてしまふのだが、向こう場とこつちに住む者がどうして巡り合い、どう思いを伝え合つたのかを思つてしまつた。

日の出に雲占いでもしたのだろうか。月夜に吠えたのだろうか。狼煙を上げたのだろうか等、下世話な現実を想像してしまつた。それで、女池から男池まで自転車走つてみた。二時間近くかかつてしまつた。歩いたら四時間以上はかかるだらう。しかし、良く考えたら男女は竜神である。人の実時間なんて関係ないのだった。

私は季節、天候、時刻ごとに様変わりする湖を見に、よく出かけて行く。竜に会えることを期待して。そして土地の人と話をするために。

風の強い日、高か津の堤で立っていると三角の波の背が動く様は、荒れ狂う波の中を竜が迫つてくるようにも見え、風と波の音に竜の声を感した。

雨上がりの夕暮れ高浜の湖畔で見たのは色とりどりの雲を映す湖の美しさ。そこには女竜の

ギター文化館発「ことば座」第9回定期公演

夏休み特集：朗読「ふるさと創作童話」

8月17日（日曜日午後1時半開場 2時開演）

近藤治平作「霞ヶ浦の紅い鯨」

打田昇三作「暗闇の子守唄」

脚本家白井啓治（ふるさと筆名：近藤治平）の口癖は「物語の生まれない里は滅びる。真実の恋の生まれない里は滅びる」です。そこで、8月公演では、夏休み；ふるさと創作童話特集として、白井啓治が石岡に越してきて最初に書下ろした童話「霞ヶ浦の紅い鯨」とふるさと風の会の打田昇三が八郷にあった実話をもとに書下ろした「暗闇の子守唄」の二作品を、ことば絵作家の兼平ちえこの描く「常世の国の五百相」に囲まれて、語り朗読と小林幸枝の演技手話朗読による立体朗読劇でお届けいたします。

前売チケット（2,500円・小学生1,800円）は、ことば座事務局、ギター文化館（0299-46-2457）、いしおか補聴器（0299-24-3881）にて発売しています。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中5-1-35
0299-24-2063 Fax0299-24-0150

泳ぐ姿が忍ばれた。月夜の高崎の田の中で流れる雲に男竜をみた。一つの伝えられてきた物語に思いを馳せて風景を見つめていると、何と沢山の物語の絵姿を映し出してくれることかと驚くばかりである。

今は、湖は遊びの釣り人が救えるほどしか見えず、舟の賑わいも漁の喜びも伝わってこない。田の風景の中にも人影はいない。田植え、稲刈りもサンダル履きで出来る。労をねぎらう茶はペットボトルで済ませる。湖にも大地にも人の

交わりは薄らいでしまった。

今、何が必要なのだろうか。これからどんなことを伝えて行けば良いのだろうか。そんなことを自分に問いかけながら大井戸の堤防に立つて南の方向にある男池の方を眺めてみる。堤防というコンクリートの塊がこの湖を囲っている。この囲いで農業と漁業がはっきりと分けられてしまった。

二匹の竜の話はざーっと伝えて行きたい話である。

夕暮れの移り変わる色彩を胸に抱き、風を肌

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

で感じたい。雨の音に耳を傾け、月夜の静けさに心をあずけ、今何が必要なのだろうか。これからどんなことを伝えていかなければならないのか感傷にふけてみる昨今である。

眠れぬ夜など、悶々としつつも、我が魂は元気で宙をさまよう。ニュートン・アインシュタインの拘束も受けぬ。手製のUFOに乗って、時空を越え、宇宙の果てまですっ飛び歩く。

私は根っからの風来坊。フウテンの寅さんと、山下清を足して2で割ったようなもの。単細胞でヤジ馬。能天気の超楽道家。好奇心が強く、宇宙・地球・生物・進化・人とは何か？などについていつも考えている。地球は「生命の楽園」とと讃えられるが、反面地震や噴火など強烈に牙を剥く。雲仙普賢岳の大火砕流や、神戸地震の後も、直ぐ見に行つた。又、治安も衛生も最悪の国へ、熱帯の動植物を見たさに、還暦過ぎてノコノコ出かけ、長期滞在した。

更に私は、賞味期限切れの「世捨て人もどき」。そろそろ吼えたり、ものを書いたりを引退しようと思つていた矢先、本会報に打田昇三先生が郷土史の中で、家内の祖先にまつわる「風間阿弥陀」のことを書かれていた。そこで、会に顔を出したら、『何か書いてみないか…』と勧められ、ついついその気になって、駄文を書き始めるようになった次第。

元々歴史に興味はあったが、「その前は？：更にそのずっと前は？」と遡り、ついに宇宙創世まで想像が及び、落語じゃないが、夜も眠れない。昂じたあげく、浮世離れした、途方もないことを書き続けて来たが、妄想癖は止まらない。脱線・余談は常習犯故、ご容赦あれ！

JICA（国際協力機構）の派遣で、畜産普及・獣医部門担当で中米に滞在した当時、夜は椰子の木につるしたハンモックに揺られ、テキラに酔いしれながら、星空に魂を吸われ、宇宙の神秘に心奪われた。本来3次元の立体的存在の星々を、古の人々は、2次元の平面座標に俯瞰し、線で結び、やれ乙女座だ、オリオン座だと、「星座」として名を付け（現在88座あり）、ロマンをかき立てる。あの美しいカリブ海の星空とテキラが、私の妄想癖に火をつけた。又、マヤの遺跡の数々を訪ね、人類の歩いてきた、長い長い道程に、とめどもなく心が奪われる。

恐れ入ったのは、高度に進化したマヤ文明。地球の公転周期を、現在値と小数点以下、4桁まで同じという天文観測の精緻さ。正確な暦法。水準器もないのに、巨大な構築物の「水平」をどうやって定めたのか？巨石を積み上げるのに、剃刀の刃さえ入らないほどの隙のなさ等々。

そのマヤ文明がなぜ滅びたのか？ 繁栄はBC1500年頃に始まり、AD900年頃が頂点。1200年頃から傾き、コロンブス以前にはほぼ衰退。原因の確定説はないが、天の神イツアナムが時間を支配するという観念にとらわれ、人間はそれに従わなければならない。予言のカレンダーにしばらくられ、丁度白人がやって来る頃と、暦法周期の、滅亡予言の時期が重なり、人々は早々に都を捨て、散逸したのだという。さてコロンブスが来る直前の米大陸には、北米に3000万人、中米・カリブ海の諸島に300万人、南米に二七〇〇万人、計九〇〇〇

万人の先住民が住んでいた。それが1492年以降、白人によつてもたらされた天然痘、結核、麻疹等の伝染病や、銃や馬（南北米大陸に馬はいなかった）による虐殺と、だまし討ちなどにより、90%の先住民が殺戮されたと云われる。そして残った先住民は奴隷として使役され、不足分は、更にアフリカから輸入された。

そしてキリスト教普及活動は、先住民の宗教や文化遺産を邪悪なものとして、徹底的に破壊した。マヤの遺跡を訪ねてみて本当に心が痛む。歴代の大王の彫像が並ぶ中であつて、第何代目は大英博物館に、第何代目はアメリカに、次はスペインのナントカ博物館にあるなどと、立て札が立っている。腸（はらわた）が煮えくりかえるような憎悪を感じる。世界をリードする先進諸国が、悠久の時を刻み、神に感謝して穏やかに暮らしていた先住民を蹂躪・侵略し、何もかも根こそぎ略奪する白人の手法だ。

ついでに、明治維新直前の日本近海には、500艘ものアメリカ捕鯨船団が鯨を捕り放題。水と野菜と薪を求めて、日本に開港を迫つたと言う。1853年、ペリーが浦賀に来たのもそのためだ。まさに資源枯渇の元凶だ。それなのに今、自分達の過去は棚に上げ、鯨を捕るのは野蛮な行為だと大騒ぎをしている。長い船旅の新鮮な食糧にするため、神にひざまずき、必要なだけを分けてもらうという謙虚な態度なら許せる。幾多の動物を滅ぼし、ラッコの毛皮など、先住民から根こそぎ奪って、貿易で利をむさぼる白人の精神が許せない。

私は単細胞。エスカレートすると、歯止めが利かない。今ニューヨークの先物市場は、世界の誰が困ろうが関係ない。自分達さえ儲ければそれでよし。巨額の投機マネーが暴走する。原油価格を操作し、あろう事か、食糧にまで手を出し、世界の貧困層をいじめ抜く。今世界中で毎日24000人が餓死しているという。穀物価格が、1年で2倍近くも跳ね上がり、バイオ燃料のからくりもあり、国連も色々な機構も、それをストップすることができない。

そして更にあくどいことが平然と行われている。それは、世界のどこかに、争いがあれば、これ幸いと武器を売る。因縁を付けて武力介入もする。軍需産業が、ブクブク太る。

中米の国家予算がたった2000億円のあの国の空を、フアントム戦闘機が毎日ブンブン飛んでいた。その国の国営発電所は、故障もあるが、燃料を買う金がなく、毎日のように停電。更に小学6年までが義務教育だが、卒業できるのは半分足らず。子供は家計を助けるために、農作業、靴磨き、車掃除、果物売りなどで働き、学校に行きたいが行けない。そういう現実なのに、外国資本が、パイナップル、バナナ、木材などで労働搾取し、利益を根こそぎ持っていく。この国は一人1日、2ドル以下の生活だが、今、世界人口の15%、9億人は一人1日1ドル以下で生活しているという。

以上は私の体験を交え、世界の不合理の、ほんの一部を垣間見たに過ぎない。みんな、自由競争主義・グローバリズムの弊害だ。

大変聞こえはよいが、「自由」とは誰かを犠牲にしなければ成り立たないものらしい。21世紀を迎えてもお、人類の愚かさは底なしだ。今更こんな片田舎の、ただのオヤジが、大声あげて、吼えまくり、わめきたてたとて、どうなるものでもない事は先刻承知。ならば、世捨て人もどきは、ただただ妄想を重ね、夢幻郷をさすらい、気の向くままに駄文を記すのみ。

そろそろ本題に入ろう！

『人の尾はなぜ消えたのか? : :』動物学や人類学の本をいくら漁ってみても、こんなアホなテーマを取り上げている論文は見つからないと言ふことは、その価値がないか、あるいはどんなに検討してみても、結論が見出せないかのいずれかであろう。ならば落合監督じゃないが、「オレ流」で、勝手気ままに云わせてもらう。

人の祖先は、脊椎動物(5億年前誕生) ↓ 魚類 ↓ 両生類 ↓ 爬虫類 ↓ 哺乳類 ↓ 霊長類 ↓ サル目 ヒト科 ヒト属として進化してきた。

サル目には、オマキザルのように、尾を第5の足にして、枝に巻き付け、器用に樹上移動をするものもいるし、長い尾の先が、チョコンと白く、草むらを移動するとき、仲間への目印にしているものもいる。いずれにしても、尾は、重要な存在に見える。またカンガルーは、2本足で立ち上がり、尾を第3の足代わりにして、ライバルとキックボクシングをする。

更に又、トカゲは敵に襲われた時、シッポを切つて、敵が動くシッポに気を取られている間に、本体は急いで逃げる(尾は後で再生する)。

まるで、部下に責任をなすりつけ、何食わぬ顔 : : : どころかの国の社長さんと同じだ。

又、ご存じの通りオタマジャクシは、水中を移動するために、しっかりしたシッポがあるが、カエルとなつて、上陸するときには、バツサリと尾は捨てる。水中で酸素を得ていた鰓(えら)も、見事に肺に切り替える。海で生まれた生物が、今から3,6億年前、両生類として、初めて陸上に進出した時のドラマを、卵 ↓ オタマジャクシ ↓ カエルの1代で再現するのだ。

ヒトも子宮の中で、ある時期には、しっかり尾があるし、鰓もあり、指の間には、水掻きもある。しかしこれらは、生まれるまでにはみな、遺伝子に組み込まれた命令により、細胞が自殺するようにプログラムされている。この現象を「アポトーシス」と云う。ヒトは、280日の妊娠期間中に、何億年もかけて、進化してきた長編絵巻 : : 即ち、単細胞から、多細胞・魚類・両生類・爬虫類の全過程を、もう一度繰り返す。更に不要物は総て捨て去り、初めて、哺乳類の「あかちゃん」として誕生する。

【三想の旅】 神様はオッチョコチョイで、自然破壊や戦争ばかりしている欠陥商品の「ろくでなし人類」を造ってしまった。そこでもし、私が神様の課長補佐になって、人類の進化を、もう一度やり直せるものなら、進言する : : :

3本足 || 地面が平らでない場合、4本足では体重加が不均等で、アンバランスとなる。2本足もかなり不安定。そこで植木職人の脚立のように、折角あった尾を捨てないで、第3の

足に進化させ、3本足とする。そうすればいく
ら地面に凹凸があろうとも、実に安定。

第3の目⇨神様は、何を慌てて正面しか見
えない所に両眼を据えたのか？ 第3の目を、
背中の真ん中あたりに、もう1つ配置すれば、
後方の敵を早く見つけ、危険回避ができた筈。

緑色人間⇨人類も葉緑体を持った細胞で
全身が覆われていれば、他の生き物を殺したり
せずに、独立栄養で、無機物から栄養素を作り、
平和な生物になれたのに。戦争ばかりしてい
る「下等動物」にならずに済んだのに。

第3の「性」⇨何で人類は「女性」と「男
性」の2つの性しか持たなかったのか。第3の
性として、いわば「完性」とでも名付け、植物
という先輩のように、雌雄同体で自家受粉し、
自己完結型にすれば、結婚相手がいないとか、
余計な事で悩まずに済む。

冬眠人間⇨これが究極の人類品種改良策。
人間活動が激しいから、地球環境は汚染する。
遺伝子改変し、徹底したスローライフ。「晴耕雨
眠」どころか、ライフラインを切断し、冬は熊
と一緒に眠る。特に活動の激しい若者や経済関
係者は、北半球で冬眠した後、南半球に移動し、
又眠る。デカンション節じゃないが、半年寝て
暮らせば、メタボ・病気・食糧・資源・戦争：
みんな解決する。特に戦争好きの大統領や、ギ
ヤング・詐欺師などは強制冬眠だ。いや、永久
凍結の、冷凍人間になり、千年も寝ていてくれ！
神様よ！反省しなさい。欠陥商品はやめて、
もう少しまともな人類を、造り直しなさい！】

さてそれでは、ヒトの尾はなぜ消えた？

ヒトもサル的一种なら、昔は尾があった筈。
それがなぜ消えたかを、誰も答えないので、
独断と偏見で、不肖私めが、お答え申す。

野生時代のヒト科の動物は、数十頭の群で暮
らしていた。大ボスが威張っていて、子分達は
いつも親分の顔色を窺っている。ヘソ曲がりや、
乱暴者は、国家反逆罪で追放され、フリーター
になり、ついには抹殺される。勿論子孫など残
せない。生き物は、子孫を残すために全力投球
することは、何億年も培ってきたDNAの不滅
の鉄則だ。そこで若雄も若雌も群の中にとけ込
み、受け入れられるよう、千切れるほどに尾を
振った。やがて群は、尾の千切れた個体の繁殖
への参加を許し、自然とその数を増していった。
ついに「尾無しザル」は、種の中に遺伝的に固
定され、全体を占めるようになった…。

【昔は、動物のボスの権力は絶大で、多数の
雌達を独占し、鉄壁のハーレムを形成すると云
われていた。しかし近年の動物行動学は、ライ
オン、オットセイ、チンパンジー等の観察から、
半分ほどの雌達は、旦那の目を盗み、せっせと
出張し、近隣の旦那衆の子を宿していると報告
している。以前にも書いたが、あるツバメ夫婦
の子6羽のうち、4羽は夫の子ではなかったと
いうDNA鑑定が出ている。夫に子育てをさせ、
せっせと新遺伝子導入に励む妻のけなげな努力、
これこそ進化の原動力なのであろう。人類も、
本来乱婚型の動物。子孫繁栄のため、妻の不倫
は大目に見てやれ！と神様が云っているが…】

話を戻すと、千切れるほどに尻尾を振った者
のみが、子孫を残すことに成功する。穏やかな
社会構造が定着していく。ところが狩猟採集時
代から、原始農業へと発展し、食糧を蓄えるよ
うになると、格差を生じ、争いが起き、国盗り
合戦等、弱肉強食型の人類に発展して行く。

【ところで、犬は人間に忠節を尽くすつもり
で尻尾を振っているが、その尾が、未だに千切
れていないところを見ると、まだまだ、忠節の
度合いが足りないんじゃないの！】

さて人類は、尻尾を捨ててまで、穏和政策を
図った筈なのに、なんで後々までも、争いの絶
えない、戦争好きの動物へと進んで行ったの
か？ それは、人口増加である。一定面積あた
りの数が増えれば、いきなり食糧難。他の群と、
テリトリーが接触すれば、それぞれ集団の存亡
をかけて、命がけの戦いをしなければならない。
以前に書いた「縄張り争いこそ生き物の本性」
と私が云いたい根元は、ここにある。(最近の動
物行動学の報告によると、チンパンジーの群同
士が衝突した時、一方のボスは、味方の若い雌
を、敵方の雄に提供し、無益な争いを避ける事
例を観察したと云う。サル智慧と笑うなかれ！)
以上、長々と、ナンセンスと真実を織り交ぜ語
り継いだが、未永く人類が繁栄するためには、
「明日のエコでは遅すぎる」。地球環境保全のた
め、今すぐやるべき事を、皆がしつかり、為さ
なければ、この「生命の楽園」は、一瞬にして、
「不毛の砂漠」と化す事を、全世界の総ての人々
が、肝に銘じるべきである。

日本に仏教が伝わった年代は欽明天皇の十三年（552）とされていたが「日本仏教史入門」などによると年代計算の誤差で正確には宣化天皇の三年（538）になるらしい。当時の日本は朝鮮半島と表裏一体のような関係にあり、半島諸国の対立抗争で、是非とも援軍が欲しい百濟（くだら）の王様が、使者に仏像と経文とを持たせて救援のお願いにやってきた。

朝鮮半島には西暦300年代の末に既に仏教が入っていたらしく、相手は貴重なものを持参したつもりであろうけれど、初めて見る日本にしてみれば「猫が小判を貰ったようなもの」ではなかったかと考えていた。豪族の蘇我氏が仏教を信じようとしたのに対して、物部氏らが「日本には神様が居る」と反対して大喧嘩にな…

漢字もろくに読めないのに賛否が争えるのか不思議であったが、かつての日本は何処かの国と同じで国民を洗脳する必要から幼稚な手品並みの嘘の歴史を教えていた。蘇我と物部の対立は日本の王位を巡る権力争いであつたらう。

日本は中国大陸とも深い交流があり、既に継体天皇の十六年（522）に南梁（なんりょう）から司馬達等（しばたつと）らが日本に帰化していて、自分の建てたお堂で仏教を信仰していたのである。達等の娘・島女は、後に日本における出家の第一号（善信尼）になる。

「梁」は中国の南北朝時代（五、六世紀）に

揚子江流域に僅か六十年足らず存在した国だが仏教が盛んで、有名な「達磨（だるま）大師」がインドから訪れたのはこの国である。

推古天皇の十三年（605）四月、高麗国から献上された黄金三百両で銅製と錦繡製の仏像を造らせた。一年後に完成して四月八日に奈良の元興寺へ銅製の仏像（高さ一丈六尺―約5m）が納められることになったのだが…日本書紀に「…時仏像高於金堂戸以不得納堂…」とあり、扉が小さくて仏像を収納出来なかった。

家庭の浴槽が木製だった時代に、私は大工さんに浴室を作って貰い、いざ風呂桶を入れようとしたら入らず入口を壊した苦い経験がある。

元興寺に集まった大工たちは、私と同じように慌てて金堂の扉を壊そうとした。丈六の仏像を造った鞍作鳥（くらつくりのとり）が一同を制して、戸を壊さずに仏像を収納した。天皇以下関係者は驚きかつ喜び、それを記念して人々に施しを行った。それが現在の「花祭り―お釈迦様の祭り」になった。鞍作鳥こそが「鳥仏師」と言われた名工で、かの司馬達等の孫になる。

日本の仏教は中国大陸から朝鮮半島からと二筋のルートで来たらしく、司馬達等の後に百濟が自分の国に大きな仏像を造り「日本の天皇に功德があることを祈った」と言ってきた。

証拠が無いので「本当に日本のために祈ったのか？」問い質したから仏像と経文を届けて寄越したのであろう。そこまでは良かったのだが、当時、朝鮮半島に流行していた天然痘まで持ち込んで来たため大騒ぎになったのだと、私は推

測している。悪疫の流行が一段落した日本では、従来から信仰していた「神様」と「仏様」とをそれぞれ崇拝するようになる。

従来は、仏教と言えば「聖徳太子」だったがこの人の実在性が疑問視される説もあるので仮に実在したとして、聖徳太子の祖父にあたる欽明天皇が西暦570年代に死亡し明日香の古墳に葬られる。次の敏達天皇が十年程のちに河内の古墳に葬られたあと、事実上の古墳時代は終わったようである。そして仏教の時代に入る。

蘇我王朝の全盛時代、先に述べた善信尼が百濟国留学から帰国して奈良・櫻井の寺に住み公認の僧としてスタートする。翌年、推古天皇が即位、さらにその翌年には日本最古の寺院として難波に四天王寺が建てられた。敷地は古代の陵墓の跡、西暦593年のこととされている。

その時代には法隆寺や中宮寺（法興寺）も建立されて、朝鮮半島の国々から高名な僧が来た。中国大陸では「隋（ずい）」の国が興り、小野妹子が遣隋使となつて対等の外交を求めたが隋は日本を属国視した返書を出して（その所為かどうか）四十年足らずで滅び「唐」に替わった。

日本の仏教は蘇我王朝の保護で寺院や僧尼の数も増え、盛んになりつつあった。初めて遣唐使が派遣された頃には全国で四十六とされた寺院の数が、持統天皇の治世中期（石岡に初代の常陸国司が来た頃）には五百四十か寺台に達していたという。国分寺設置の詔が出される約五十年前のことである。

順調な仏教界にも問題が無かった訳では無

い。推古天皇の三十二年（624）四月三日に一つの事件が起こった。どの記録も場所は明らかにしていないが、ある僧が自分の祖父を斧で襲い殺害したのである。僧の凶行は大問題になった。その原因は何か？端的に言えば「質の低下」であるが、それは政界、経済界、産業界など現在にも当て嵌まる。根本原因は他にあった。

当時の仏教界には導入当時から欠落していた重要な要素があった。司馬達等らが個人的に信仰していた仏教は中国から持って来たものだが、百済王が日本に寄越したのは朝鮮半島に伝わるもので、仏教本来の趣旨を誤解していた。

インド（現在はネパール）に生まれた釈迦はヒンズー教徒として徴兵制度のように義務化された「修行」を続け、ラージギルの霊山に籠もって山岳修行に挑んだ。高僧アララ・カマラの指導を受けていたが、カースト（身分制階層社会）の厳しいヒンズー教の無意味な修行に疑問を感じて六年間で山を下りた。

思い悩みつつ八十キロほど歩いて前正覚山に立ち寄ったが得るところ無く、幽霊のような姿で尼連禪河の畔にある村へ辿り着いた。痩せこけた釈迦を樹木の精霊と間違えた村の娘スジャータが乳粥を捧げた。一碗の粥が命を救い、枯れ河を渡ってブツダガヤに來た釈迦は一本の菩提樹の下で自分の為すべきことを知り「迷える民衆の濟度」を企及する為の生涯の旅が始まる。

当時のラージギルはマガダ王国に属していた。ヒンズーの行者たちが「苦行を放棄した者」と釈迦を軽蔑する中で、マガダ国王のピンピサー

ラは釈迦を「偉大な人物」として見抜いていた。「正覚成道の暁には、再びこの地に戻って衆生に正法を説くこと」を国王と釈迦は約束した。仏教教団が形を成し、国王との約束どおりラージギルを訪れた釈迦は竹林精舎を開き、そこで悲しい話を聞かされた。

国王と王妃には子供が居なかった。ヒンズー教の占いで「山中に修行中の老僧が衰弱死してのち、功德により王子に生まれ変わる」と告げられた王は老僧の自然死を待てず、殺害させた。予言どおりに王妃は懐妊し王子が誕生したのだが、自分の出生の秘密を知った王子はクーデターを起こして父王を石牢に幽閉し命を絶った。

釈迦が仏教を教団化したとき、比丘尼（びくに）と呼ばれる尼僧も大勢居た。比丘と呼ばれる男僧の中に釈迦の従兄弟である阿難（あなん）と提婆達多（だいはだた）が居り、教団幹部であるこの二人が極上の美人尼僧ウツパラバンナーに迷って阿難はこれを犯し、相手にされなかった提婆達多は彼女を殴り殺してしまった。

美男子の阿難は女性問題で釈迦を悩ませ続け、提婆達多は釈迦の追及を恐れて殺害を謀った挙句に、数百人の弟子を連れて教団から離反したようである。王子によるマガダ国王殺害は提婆達多が唆したものと伝えられている。

「親の心子知らず」仏教教団のお膝元でも釈迦の顔に泥を塗る事件があったのだから、仕方が無いと言えはそれ迄だが、寺院や僧、尼僧が増え続けた奈良時代く平安時代の日本でも艶っぽい？出来事が頻発していたようである、その原因

の一つが仏教傳來時に釈迦が目指した「民衆の濟度」が伝わらなかつたことによる。仏像と經典を持参した百済国の使者は「：仏法に帰依すれば、仏の加護で国は安泰、敵を調伏できる：（鎮護国家のために有効）」とだけ言った。仏教の本来である「庶民」のことには一切触れなかつたのである。このため、後に諸国に国分寺と国分尼寺を建立させた聖武天皇も、国家つまり朝廷の安泰だけを目的にしていた。

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

- 8月31日 北川 翔 バラライカコンサート
- 9月 7日 チャン・デゴン ギターリサイタル
- 9月20~21日 第2回フラメンコギターの祭典
- 9月28日 福田進一 ギターリサイタル
- 10月18日 宮下 祥子 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
0299-46-2457 FAX0299-46-2628

観光名所ともなっている吉生の峯寺山西光院は徳一大師の創建と伝えられる。この寺が天台宗に属すると聞いて私は耳を疑った。徳一大師と言えば天台宗祖・最澄と「三・一権実論争（さんじつろんそう）」を展開したことで知られる。

遣唐使に従って唐の都で玄奘三蔵法師に学び日本で最初に火葬にされたのが「道昭」である。

当時の日本の仏教は道昭が持ち帰った「法相宗（ほっそうしゅう）」が売れ筋で、この流れは奈良の興福寺、法隆寺、薬師寺などに残っている。

法相宗に属した徳一大師の論理は当時の仏教が天皇や貴族階層に庇護されていたことから「人間が往生するにも差がある」としていた。

千二百年経った現代も格差時代であるから徳さんの言うことも間違いでは無いが腹は立つ。

当時は奈良仏教の権威が増大化し、特に聖武天皇時代から称徳天皇時代にかけては高僧が朝廷内部と接近して政治に介入することもあり、とても庶民の出る幕は無かった。

本来、出家するには厳しい選抜が適用されるべきのだが、律令制度の崩壊と社会の混乱から行われずに、生活苦から逃れる目的で僧になる者やら、？付きの僧や尼僧がやたらに増えてきた。それを正すために「戒律の師」が必要とされて、遙々と招かれた鑑真和尚（がんにんわじょう）が苦難の道を辿って来たのである。

徳一大師が主張する「身分差のある往生論」に対して、最澄は「大乘仏教」が大きな乗り物に例えられるように「迷える人間が遍く救済さ

れなければならぬ」と反駁している。それだけの理論を主張できる人物は居なかったから仏教界の改革に必要な人材として伝教大師こと最澄が着目されたのである。最澄を見出したのは石岡ゆかりの平氏や大掾（だいじょう）氏の祖・第五十代の桓武天皇である。

父親の光仁天皇が早くから仏教界の在り方を案じていたのだが、自分は定年間際にやっと天皇になれたので言いたいことも言えずに辛抱していた。それでも退位の前の寶龜十一年に勇氣を揮って「怪しい占いやイヤラシイ行為や出鱈目な御祈禱などを厳禁する」とキビシイ勅語を出している。勿論、対象は諸国の寺院である。

先帝の意志を継ぎ、墮落した奈良仏教を「どげんかせんといかん」と考えた桓武天皇は、既成の仏教に影響されない人物として最澄を選び仏教界の建て直しに期待した。

世俗的権威に密着した古い仏教と決別するために、最澄は比叡山上に粗末な屋舎を設けた。厳しい環境下に藁を寝具とするような極貧の暮らしと修行を実践して、これを「国家に有用な人材を育成するため」とした。比叡山の学僧として学んだ人々の中から後に「鎌倉仏教」として花開く優れた思想家たちが生まれ出た。曰く「栄西（臨済宗祖）」、「法然（浄土宗祖）」、「親鸞（浄土真宗祖）」、「道元（曹洞宗祖）」、「日蓮（法華宗祖）」などの求道の師たちである。

天台教学のうち、最澄の直系である慈覚大師（円仁）、慈恵大師（良源）、恵信僧都（源信）らによって体系化された浄土思想が空也上人や

一遍房智真らの遊行僧に引き継がれ、念仏仏教として地方に広まってゆく。長い年月をかけて仏教はようやく庶民のものとなるのである。

仏教の普及過程で、豪族のように古墳は造れなかった庶民の埋葬形式も変化した。火葬が一般化するのには西暦700年以降であるが死者の靈魂を意識するようになって、住まいの近くに穴を掘り死者を屈葬していただけの墓地に塔や石、板碑が置かれ、墓地も広い見晴らしの良い場所に移されたりした。

大化の改新の頃に「人民の墓地を耕作地に置いてはいけない。荒れた場所に造れ」という命令を孝徳天皇が出している。自分たちの広大な陵墓のことを忘れてよく言えるものだが…これは耕作地を増やして税をとる算段である。

損得を抜きにして「地獄・極楽」の思想が広がるのは仏教伝来の影響であろう。日本の神話にも「黄泉（よみ）の国」は出てくるが、行かなければ避けられると思われていた。その名残で妻が夫より先に死亡した場合は、墓所を別にする風習が何処かに残っている筈だが…

人間が「死」を肯定した時に、将来を二者択一で選べと言われたならば「苦の地獄」よりも「極楽」を選ぶ。因果応報の思想は早くから伝わっていたが庶民がそれを具体的に知るのには念仏仏教の普及によってである。

仏教界の改革を目指す桓武天皇は専門的なことを最澄に任せて、自分は奈良仏教界を弱体化する策を考えていた。あれこれ思案の末に思いついたのは「奈良からの脱出」であった。金

はかかるが有害なもの丸ごと放棄すれば良い。

こうして延暦三年（784）夏に京都市よりも大阪に近い長岡京に都が遷された。しかし翌年には桓武天皇の腹心で長岡遷都を実行した藤原種継（皇后の従兄）が暗殺され、その事件に関わった疑いで皇太子（桓武帝の弟）が廃されて絶食死した。万葉集の歌人として知られた大伴家持の一族などが藤原種継と勢力を争った結果らしいが、長岡京では天皇の実母や皇后などまで病死する不幸が続き、再度の遷都が計画される。それが「鳴くよ（794）驚平安京」：

奈良を捨て長岡京を見限って平安京に遷った桓武天皇ではあったが、嫌な思いは消えない。自分でも神仏に頼るほかはないから固く決意した「仏教勢力の排除」にも力が入らない。桓武天皇の息子は三人が天皇になっている。

長男の平城天皇は、悪女・藤原薬子に翻弄されて「お騒がせ」で終り、三男の淳和天皇は短期間ながらも地方の復興に尽力した。この天皇は石岡に來た常陸国司・藤原宇合（ふじわらのうまかい）の曾孫になる。母親の藤原旅子は長岡京で若死にしたが、鞍馬から琵琶湖へ抜ける街道脇の山中にある還來（もどろき）神社に名前のおり旅の神様として祀られている。

桓武天皇の意志を継ぎ、仏教界の改革を目指したのは次男の嵯峨天皇である。ただし父親の桓武天皇が最澄を重用して人材の育成を図ったのに対して、嵯峨天皇は空海の持つ思想体系と長期留学から得た新知識に期待したらしい。

弘法大師空海は、桓武天皇や最澄が嫌った奈

良仏教とも妥協し、自らは唐の都・長安で学んだ真言密教秘法の道場として高野山を開いた。

頼りにした空海が自分の世界に籠もってしまうから既成仏教の墮落にも強く言えない嵯峨天皇であったが、治世四年目の弘仁三年（812）夏に「近城の諸寺住持寂絶淫濫の声聞あり！」という報告が天皇の耳にまで達した。この記録は史料に依って次の仁明天皇時代のこととされている。嵯峨天皇は退位しても元気で先皇として君臨していたのであろう。

嵯峨天皇は、桓武天皇からも言われていたことを思い出した。しかし“怪しげな”内容が寺院内とはいえ男女間のことであるため、追及の矛先が鈍る。嵯峨天皇の正室は橘嘉智子（壇林皇后）で夫人は交野女王（天武皇子の孫）だ。が生まれた子女五十余人というから頑張っても女性二人では無理な話で多くの側妾がいた。

それでも黙認する訳にはいかないから、速やかにかつ遠慮がちな詔勅を諸国に発した。「此の頃、俗輩の男女、事を講聴に託（かこつ）け猥（みだり）に僧尼の寺院に入り説法訖（おわり）て後、屢（しばしば）侵犯の事あり外は勝因に似て内は却て浄業を汚す自今以後、男子尼寺に入り、女人僧房に入るべからず……」

石岡にも国分寺と国分尼寺があり「その間に長い回廊が在った」という艶話が残っている。回廊は嘘であろうが、両寺院の間には山王川の支流が流れていたようだから、行き来に便利な橋ぐらいいは架けていたかも知れない。

「坊さんの法話を聞くふりをして、寺院内で

イカガワシイことをしてはいけない」内容的には天皇が言うべき苦情ではないが、それを言わしめるほど墮落が酷かったのである。この時には「禁止令」より以前に尼寺へ行った僧侶や、僧房へ來た尼さんは「行き得」だったらしい。

弘仁三年に嵯峨天皇の耳に入った事件というのは、平安京の或る有力な寺院で起こった「殺人未遂」「婦女誘拐・監禁」の犯罪が絡んだもので、被害者が友人と相談して「検非違使庁」に届け出て明らかになったものである。

具体的なことは知られていなかったが、江戸時代中期に編述された「前々太平記」に「朝山難に遭う」という物語がある。それが嵯峨天皇の僧尼禁令に関わった事件だと私は推定した。

主人公は越前国に小領地を持っていた「朝山源十郎」である。古代からの由緒ある家に生まれたが早く二親を亡くし、兄弟もなく、学問好きだが欲が無いから田畑を耕して生きる才覚も持たない。一人身なので都へ出て学問で身を立てようと家屋田畑を売払って、幾許かの金に換え小さい荷物一つを背負って郷里を出た。

西近江路を辿って琵琶湖の西岸を回り近江舞子の浜に近づく頃は日が傾き暗くなってきた。目の前に滋賀県の名前の素になった「志賀郷」の灯りが見える。街道が湖畔の林にかかり暗さが増した辺りで、不意に四、五人の盜賊に襲われた。前後から押さえつけられたので抵抗する間もなく打ち据えられて衣服から路銀の金、荷物までを奪われ道端に丸裸で放り出された。

辛うじて命があったのは未だ運が尽きない証

しと身体中の痛みを堪えて志賀郷まで辿り着き漁師小屋の軒先にあつた菰（こも）を着物代わりにして、近くの家に声をかけた。手燭をかざしながら出て来た主は、源十郎の姿に驚き怪しみながらも、嘘偽りのない様子を感じて家の中へ招き入れてくれた。

源十郎は膝を揃えて礼を述べ生国・姓名を名乗ってから、国を出た目的と盗賊に襲われた経緯を述べ、一夜の宿を頼んだ。

「それは難儀なことに遭われた。この街道は途中に漁師の部落があるから、物騒な話はあまり聞かぬのだが、近頃は比良山地に住み着いた盗賊が旅人の荷を掠めるといふことを聞いた。そやつめらの仕業であろう；承知致した。お泊め致そう。ご心配なされるな」

主は夫人に目配せした。夫人は手ごろの衣類を源十郎に着せてから、琵琶湖の魚を煮てわざわざ飯を炊き、質素ながらも暖かい食事を与えてくれた。安らかな眠りを得た源十郎は、翌朝、漁師夫婦に深く頭を下げた。漁師は源十郎に幾許かの路銀を与え、励まして言った。

「私は久佐吾と言う、さる仔細があつてご覧の通りしがない漁師だが、昔は藤島兵太と名乗つて武士の真似事もしていたこともある。力になりたいが、この程度のことしか出来ぬ。貴殿は自分の夢を果たされよ。縁あらば再び会うこともあろう。それまでお互いに達者でいようぞ」

「実の父母の再生かとも存知ますこのご恩は忘れることがございません。人並みになりましたならば必ずご恩を奉じに参ります」

朝早く親切な漁師夫妻に別れて志賀の浜を經ち都を目指した源十郎は、足早に歩いて比良峠を越え大原を通り、その日のうちに平安京を目前にした洛北の白川に辿り着いた。

白川には遠い親戚の者が居たので、一先ずはその者を頼つたが、暮らし向きも悪いので長居は出来ない。奉公先も決まらず藤島兵太に恵んで貰つた路銀も尽きる。そのような時に或る人が教えてくれた。

「当節は仏教が盛んで、都中の寺が繁盛している。何処かの寺に頼んで自分の得意な芸を売り込めば雇つてくれるのではないか？」

源十郎は天の助け！と、言われたままに大きな寺院を探し歩いた。都大路に行くまでもなく、洛外に「これは……」と思うような寺院があつた。取り敢えず方丈（ほうじょう）——この場合は、その寺の長老の住居——入口に立ち案内を求めた。出てきたのは中堅の僧で「清真」と名乗つた。

源十郎は自分の素性と勉学の志を述べ「御慈悲をもつて当寺院の雑用にお雇ひ戴ければ有難く勤仕申すべし」と懇願した。

源十郎の人品卑しからざる様子を眺めていた清真は「そなたは如何なる技芸をお持ちか？」とたずねた。「山水画を描きますが、花鳥風月は一通り書いております」と応えれば、直ぐに紙と絵筆、絵の具が準備された。

その場で描きあげた源十郎の絵を見て清真は「筆法はもとより絵もまた風流である」と驚き「この寺は広いゆえ、人一人を養うは容易いことである。先ずは愚僧の坊に來られよ」と、そ

の日から寺院の雑務係に採用された。

源十郎は広大な敷地内にある幾つかの寺を回つて雑用をこなし、時には僧たちの話相手にもなつていた。学問もある源十郎は誰彼の別なく接して気に入られ、なお勉学の志あることを知る僧の紹介で寺に出入りする公家や学者にも私事することが出来るようになった。

普段は清真の僧房に住む源十郎であつたが、二年近く経つた或る日のこと、その日は清真が不在で急ぎの用事も無かつたので、見慣れた光景ながら自然の豊かな院内を散策していた。

清真の同僚である為空という僧の房舎がある。玄関先へ回つて声をかけたが為空も留守のようである。裏に回つてみると小坊主たちが、主の留守を幸いとあちらこちらで居眠りをしている。咎める者も居ないままに、普段は行つたことも無い奥に足を踏み入れた。木々の梢に緑が増して静寂が辺りを支配している。

ふと、かすかに樗蒲（ちよぼ）というサイコロを転がす音を聞いて源十郎は立ち止まつた。誰か客でもあるのかと、音がした寺院の後方に行くくと建物の影で陽光の届かない暗がりには梯子の付いた櫓造りの建物があつた。「こんなところに……」と思ひながらも、立ち去ろうとした源十郎が無意識に急な階段を登つていった。

——闇処に樓梯あり何の思慮もなく直に樓に進み上げれば樓上に二人の美女相對して居れり、何れも紅顏翠黛（こうがんすいたい）、絶代の美色なり、源十郎を見、驚怪みたる風情にて、此樓は外人の來る處にあらず、誰人にて渡り候ぞ

や、某は此の寺中に久しく寄宿せる者なり、今日為空他行に依つて、樗蒲の音を認めて凶らずも此に来れり、唐突の罪を赦し給へと申さば、婦人声を低うして、君には未だ此處の様子を知り給わぬ物なるべし、此は寺僧密遊の楼にて、若し誤つても此に来れる他人あらば、必ず殺害せらるるなり、人の知らざる内に早く立ち帰り給へと申す、源十郎聞いて、さるにても心得ず、御言葉の未彌不審（いよいよいぶかし）くこそ存ずれ、先方々は如何なる人にて渡り給ふぞ

一人の婦人、妾は江州志賀郷藤島某が女松枝と云う者なり、幼年より京に上り、撰官（せつかん）近畿諸国を行政監察する高官）の家に宮仕し、今已に十七になりぬ、今春当寺の淫賊に欺き奪われて此にあり

又是なるは洛陽に絹を商う人の妻なり、或は邪薬を用ひ或は瘧薬を与えて、是非無く此に押入れられて、再び戸外に出づる事を許さず、過ぎし比にも一人の男子誤つて此に來りしを、僧徒何の沙汰もなく刺殺し、後山に埋めぬ、君を若し見つけなば不幸の死あるべし、早疾く去り賜へと云えば、源十郎横手を打ち（承知して）扱も不思議なる縁こそあれ我國を出し時、途中にて盜賊に逢ひ、死に及びしを、御父藤島久佐吾の御情にて辛き命を助かりぬと、覺えず談熟（ものがたり）して時を移しける、斯かる處に為空、院に帰り、樓に登つて源十郎を見、さらぬ體にて打ち笑ひ、貴方には如何にしてか此處を知り給ひて來たれるぞや、源十郎偽る言とは知らず、我今日師を訪ひしに空房なり、暫く憩

ふ處に遙に陸采の音を聞いて、來客後院にあるかと尋ね來り、偶然として此仙臺に至りぬ、意（おも）はざりき、師兄等此風流の樂ある事を、平生隔なき某に今まではよくも隠し給ふと戯ぶれて申しければ、為空其のまま座を立てて樓を下り、往來の路の門戸を鎖し、覺静と云える友僧を呼び來り、兩人して源十郎が左右の手を把つて引立て、一の板室の内へ連行きける、偏に禁獄の屋の如し、即ち細索（ほそひも）一條、剃刀一柄、砒霜（毒薬）一貼を与えて曰く、汝此三品の中何れにても心に任せて用ひ、死を速ぐべし、然らずんば只今縊殺（くびりころ）すなりと云えば、源十郎大に驚き、我は是同じく寺中の者、外人の如く密事に於いて何の妨かあらん、当然の科は免せ給へと申しける、為空が曰、我僧家に密誓願あり、唯剃髮の者は、皆我輩の密遊を知ると雖も之を許す、有髮の者に至ては親父兄弟親友たりとも更に許さず、何ぞ況や汝をや、源十郎が曰、左あらば我も亦願わくば剃髮して僧となるべし、覺静が曰、汝年來勤学切磋して卒業の望あり、今一時の難を逃れんため剃髮せんとは実の心にあらざ、今日汝を害せずんば、汝明日必ず我輩を害すべし、譬儀秦（たとえ、ぎしん）古代中国の弁舌巧みな策士）が舌を以て脱れん事を述ぶとも更に赦さざる所なりと、已に逼り殺さんとす

絶体絶命の窮地に迫り込まれた源十郎は覺悟を決め、せめて、世話になつた清真に別れを述べて死にたいと申し出た。為空と覺静は相談して「清真殿に命乞いしても無駄ですよ」と、

厭味を言つてから呼んでくれた。

事件を聞いて駆けつけ清真は、さすがに驚き慰める言葉も出なかつた。源十郎は無駄と分かつてはいたが二年間、仕えた清真を見ると思わぬ涙を流して許しを乞う言葉を口にした。成り行きを読んだ為空と覺静は「清空殿、たかが使用人一人の命より寺院内の法は重いのですよ」と狂つた牽制球を清真に投げ、解決を急いで自分たちが源十郎を刺そうとした。

それを押し留めた清真は「源十郎殿、そなたの菩提は私が懇ろに弔うから、どうか覺悟して自分で最後の手段を選ばれよ」と言つてから「日頃のよしみを思えばこの場では気が重い。どうか五日ほど猶予を与えてやって欲しい」と二人に頼んでくれた。二人は洩々承知して自殺道具の三品を源十郎の前に丁寧と並べた。

牢には鍵が掛けられ三人の僧は立ち去つた。五日以内にロープか刃物か毒薬かで死ぬのだが、どれも楽ではない。じっくり選んでいたいのが、それよりも恩人である志賀の藤島兵太の娘が拘束されているのを助け出さなければ：見渡したところ牢屋は手抜き工事が無かつたらしく頑丈そうで素手では壊れそうもない。

一方、松枝も「源十郎が早く逃げていてくれたならば：」と思うにつけ、故郷の父母が助けた者を自分と出会つたばかりに死地に陥れてはならじと、一時、自分も囚われていた牢屋の様子を思い出し、脱出方法できる方法を考へて源十郎に知らせることにした。

牢の中の源十郎は絶望しかけながらも、せめ

て唯一の刃物で壁板でも剥がせれば：と見上げたときに小さな隙間から利口そうな鼠が一匹、顔を覗かせて挨拶をした。つれづれに松枝が餌を与えている鼠である。見ると首輪のようなものを付けている。「何かある！」源十郎は鼠を呼んで首輪を外させ、小さな紙片を取り出した。

手紙は松枝からのもので、牢屋の構造と脱出方法が詳しく書いてある。それに従って先ずロープの先端を結んでから梁に投げて絡ませた。毒薬はお札に鼠に渡す訳にもいかなないから残しておいて、刃物は結んで腰に下げ、ロープを伝って梁に上り、天井板を蹴り上げてから刃物で壁の隙間を削り、瓦を壊して屋根に潜み、暗くなるのを待って寺院を脱出した。

源十郎は知り合った学問の友の家飛び込んで事情を話し、集まった知人たちが訴状を作り一同の連名で検非違使庁に訴えたのである。

自分たちの悪事を隠すために、源十郎を捕えて親切に自殺道具を三種類も準備してくれた僧たちは、約束どおり五日目には時間を早めて牢屋の前に行った。死体は早く処理しなければならぬ。未練たらし、未だ生きていたら殺すつもりであった。薄暗い牢の鍵を開けて愕然としたのは言うまでもない。

「逃げられた！」と分かってからの対応は迅速であった。隠れ部屋や牢屋などは解体されて跡形も無くなり、松枝たちは裏山に監禁され、主だった僧たちは諸国修行と称して行方を晦ました。残されたのは「とぼけ役」の僧と小坊主だけで、詳しい事情は知らされていない。

ふるさと風の文庫

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の歴史エッセイふるさと「風にたずねて」(/)

(二冊組：1000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文集大成!!

ふるさと「風のことば」(定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ「風邪に押されて」(定価500円)

小林幸枝「風に舞う」(定価500円)

白井啓治「移ろう風の中に」(二冊組：800円)

近藤治平「風に吹かれて」(二冊組：800円)

ふるさと風の文庫は、

・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局

石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

僧侶の官位は職掌を含めて七、八十の肩書きがあつた。定石どおり寺院に踏み込んで権威を笠に開き直られても困るので、源十郎らの訴えを受けた検非違使は「盗賊」として三人の僧の逮捕状を取った。身に覚えのある僧たちも序でに逃亡してくれたから、残された「とぼけ役」

が安心して必要以上に全てを話したため、寺ぐるみの悪事が立証された。裏山の洞穴に監禁されていた松枝らも無事に救出された。

逃げた僧には殺人犯の逮捕状が出され、留守

番の僧と小坊主は真昼間に裸で寺を追われた。主犯の清真、為空、覚静が溜め込んでいた家財は没収されて大部分が源十郎に下賜された。

源十郎は松枝を伴って近江・志賀の浜に漁師・久佐吾こと藤島兵太を訪い、かつての礼を述べると共に改めて松枝を妻に望み、藤島の家で婚礼の式を挙げた。

―長くなったが、仏教界の改革を目指す嵯峨天皇が弘仁三年に聞いた事件というのは、概略以上のようなことであつたらう。この話は事実

かも知れないが、仏教が国家・皇室だけのものから庶民のものになる過程で興ってきた「浄土希求」「因果応報」「輪廻転生」「地獄極楽」などの考え方がこの物語には投影されている。

三人の僧は、源十郎が妻を伴って越前に帰ろうと堅田の港で船待ちをしているときに船底に隠れていて発見され、役人に逮捕されている。源十郎は、五日間待ってくれた清真だけを厳しく説教して見逃してやったようである。

この事件に懲りて仏教界の風紀が是正されたかどうかは分からない。約七六〇年後に織田信長は比叡山を焼き討ちして数千と言われる僧侶と数百人の女性を殺害している。その言い分は「比叡山の僧徒が」帝王公方へ弓を引き、魚鳥姪戯を事として頗る沙門の道に背く、是は是釈門仏家の僧徒にあらず、天下の政道を相妨ぐ、仏意冥慮に打ち背きて、只国賊なるべし、(織田軍記)と比叡山の坊さんが女性を囲っていることなど、仏教界の墮落を非難しているが、本心は比叡山の勢力が、敵の浅井に味方したことを怒っただけのようである。

十年後の天正九年には数百人にのぼる高野山の僧が首を斬られている。これは信長が討った荒木氏の残党が高野山に匿われたためである。高野山にも比叡山と同様にごく近年まで僧侶のお相手をする女性が居たというが、織田信長も「高野山の不始末」とは言わなかった。

国分寺ゆかりの聖武天皇が藤原不比等の娘・安宿媛(光明子)を皇后にしようと図ったとき前例と律令を持ち出して皇族以外からの立后に

一人反対したのは「長屋王」である。この人は天武天皇の長男で太政大臣まで務めた高市皇子の子であり、皇位継承の資格はあった。藤原氏の専横に釘を刺したのだが、天平元年に無実の罪に落とされて命を絶った。

嵯峨天皇の時代に出来たとされる「日本国現報善悪霊異記」には「己が高徳を好み、賤形の沙彌(在俗の僧)を刑(う)ち、もちて現に悪死を得る」として、長屋王がかつて元興寺の法要で、僧に対する供養を担当した際に、見知らぬ僧が布施を受けたのに立腹して象牙の笏で打ち据えた。その報いで失脚したと説いている。

この物語は「長屋王事件」に追従して語られたもので、広大な屋敷跡が発掘されている長屋王が、自分が出したのでもない飯の一杯ぐらいで坊さんの頭を殴ったりはしまし。

長屋王事件は明らかな陰謀であり、謀反の疑いをかけられたため、呆れ返って申し開きもせず自分から死を選んだのである。聖武天皇は、このことを苦しみ続けて、心の平安を願い、大仏殿やら国分寺やらを建てさせたのではないかと疑っているのだが：(ごめんなさい)

悲しいことだが「因果応報」「地獄極楽」も、それを扱う神様や仏様の匙加減一つで、どうにでもなるらしい。弱い庶民はそれでは困るので、偉そうな占いや得体の知れない宗教が幅を利かし、凶悪な犯罪が頻発する現代にこそ、御仏の慧眼で「本当の罰当たり」への処分が厳格に行われて欲しいのである。

万人を救おうとしながら、お人良しだった自

分の指導力不足が基で、仏教教団から「不肖の弟子(従兄弟)」を出してしまったお釈迦様も、二千六百年経って、そう願っている筈である。

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・

蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)の「うらら」ちゃんが皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00

16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一滴みの土を分けていただき、自分の風をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

0299-55-4411

劇団「ことば座 夢俱樂部」(第四号)

ことば座季刊誌、夢俱樂部は今回の四号から風の会報にドッキングさせてもらうことになりました。基本的には季刊に発行して行きますが、常世の国の恋物語百の取材ノート、ことば座協力のアーティストの皆さんから寄せられた情報など掲載して行きたいと思えます。スタートして一年にまだなりません、リニューアルしたことは座夢俱樂部、宜しく願っています。

(編集事務局)

ふるさとを朗読舞に

ことば座座長 小林幸枝

本号から、ことば座季刊広報紙「夢俱樂部」を、兄弟紙「ふるさと風」にドッキングさせていただくこととなりました。ことば座そのものは元々「ふるさと風の会」の弟妹分ですので、ちよつと甘えさせてもらい兄弟の軒先に看板を一緒に下げさせてもらおうと勝手に押しかけてまいりました。

ことば座は、ふるさと(霞ヶ浦を中心とした常世の国)の物語を朗読舞に表現して行こうと設立した劇団ですが、ことば座の発信拠点とさせていたいただいているギター文化館では、常世の国の恋物語百に挑戦させていただいています。六月の定期公演では、霞ヶ浦物語として行方市の三味塚古墳をモチーフにした恋物語を演じさせてもらいましたが、十月公演

では霞ヶ浦物語の第二弾を予定しています。

六月公演で三味塚古墳をモチーフにした物語を演じたおかげで、それまで行方市というと芹沢鳴ぐらいいしか思い浮かぶものはありませんでしたが、沢山の歴史・文化の見所のあることを知りました。

見所の一部を紹介しますと、西蓮寺の仁王門、相輪櫓、万福寺の阿弥陀堂と仁王門、法眼時、宝幢院銅鐘、大塩家住宅、麻生藩家老屋敷記念館、観音寺、中根八幡神社、熊野神社、観音寺、八坂神社などなどがあります。

七月十日(二十五日)、西蓮寺では山百合まつりが行なわれました。この山百合は、一人の老人が荒れ果てた雑木林に一輪の山百合を見たとき、山全部に山百合を咲かせようと、始められたのだそうです。

この山百合まつりでは、昨年からことば座公演にお手伝いしていただいている、オカリナ奏者の野口さんの演奏があり、野口さんの作詞作曲の山ゆりの里が演奏されました。

ことば座がスタートしてまだ一年半ですが、ふるさとを演じていくことで、これまで気付かなかったふるさとの素晴らしさを、改めて知らされております。今こそ、私達は、これまで無関心に捨ててきた沢山のふるさとを意識して見直してみることが大切なのではないだろうか、思っております。

ことば座の発信する物語が、ふるさとを見直す切っ掛けになれば、と期待して止みません。八月の公演は、夏休み特集としてふるさとの創作童話を、手話と声での朗読コラボレーションを行ないます。大正時代の八郷の実話を基にしたお話しと舟塚山古墳と霞ヶ浦をモチーフにしたファンタジック童話です。

ご来場、お待ちしております。

八郷のアルハンブラを語る(3)

ギター文化館代表 木下明男

編者「本格的な夏の到来で些かウンザリする陽気ですが、今回もまたギター文化館建設にまつわるお話を聞かせてください」

木下「そうですね、重い話にならないようにね。そういえば先日、元町議員のU氏の亡くなられた記事が「おくやみ」欄に掲載されていました。そこで思い出すのは、何の取っ掛かりのない町に、ある紹介者を介してU議員を尋ねたのが始まりだった、という事でした」

編者「それは何時頃のことですか?」

木下「M・カーノ先生が亡くなられ、間もなくM・カーノ記念音楽事業団が生まれたのが一九九〇年ですから、ギター文化館の建設候補地の選定に動き始めたのは、この年だったと思いますよ。労音会長I先生の仲間S氏の親戚筋がU氏?…の関係だったと思います」

編者「どんな感じでした?」

木下「U氏は、快く承諾してくれて、直ぐに町の議員、観光商工課の課長や担当者と合わせてくれました。候補地の状況や、候補地以外の土地の選定、土地取得に必要な諸手続き、地元業者の紹介、バブルの末期とはいえ、まだゴルフ場建設のための土地の買収などがあり土地取得のための相場等々色々なアドバイスや情報を教えてもらいました」

編者「木下さんが全部動かされたのですか?」
木下「いえいえ、全部を一人でやることなんか出来ません。事業団の有力メンバーだったH氏や、そ

の配下で事業団の事務局として今、ギターショップA店社長のM氏等が一生懸命に動いてくれました。H氏やM氏の報告と実際の現地説明会に当事者として説明会に出席し地元の方とお話した事は、覚えています。話は昔のことなのでかなり前後しますが、全般的に町の役場や教育委員会関係者、町の有力者の方々は概ね好意的でした」

編者「地元では、何故反対だったんですか？」

木下「余り詳しくは分かりませんが、一部の人が買収金が支払われたなどの誤解が噂として流れたり、元々他所の人が入りづらい土地柄だったようです。労音は性格からして、そんなことをする団体ではないと懸命に説得を試みたのですが、中々聞いて貰えませんでしたね。今では、地元の人たちにも好意的に見て貰っていますが…。そう言えば、ここは2期目毎に町長が逮捕されるという不思議な所ですね。初めてお会いした町長が捕まると、町の担当者も代わってしまったのは困りましたね」

編者「笑えないご苦労ですね(笑う)」

木下「そうなんです。町議のU氏を紹介してくれたいS氏に東京でお会いした時に『ギター館はどうなつてんだ。紹介だけさせといて何の報告もないじゃないか』と叱られた事がありました。その時は、必ず町議のU氏と一緒に招待しますと言ったのですが、残念ながら御礼も出来ず終わったのに悔いが残ります。残念な事がもう一つありますね。最近の事です。ギターショップA店社長のM氏の後を引継いで事務局を担当してくれた、税理士のT先生が急逝したことです。そのT氏も数年前に退任し暫くやり取りがなく突然だったの

で驚きました。この事でも、十六年という年月の長さをしみじみと感じますね」

編者「十年一昔とは言いますが、十年という一昔のなかには沢山の出来事があるわけで、ましてや十五年を過ぎての中にはまだまだ沢山のお話しをいだけそうですね」

木下「小さなことを含めたら、お話しするのに、それこそ十五年の月日が必要になりますね。土地を提供してくれた杉山さん、成田さん2人には、それぞれ大変お世話になりました。特に杉山さんには大変お世話をかけました。杉山さんは、提供してくれた畑には特別な思いがありまして、そのことを綴られた文章が、ギター文化館に今も展示してあります」

編者「そうですね。では、次回にはその杉山さんのお話を是非お聞かせ下さい。今日はどうもありがとうございました」

山百合の里、永遠につづく

オカリナ奏者 野口喜広

私が、行方市井上の山百合の里でオカリナ(土笛)を演奏させていただいて四年目、四回目になった。今年、私のオカリナ教室の生徒さん達の演奏も多くのお客様に聞いていただいた。山百合の香につつまれた中、里山中に「ぶたましたオカリナの音色は「最高ですね」と皆様からお褒めの言葉を頂いた。先日、七月十日〜二十五日まで約二週間続いた山百合まつりが幕を閉じた。今年、山百合の開花時期が遅れ、まつりの終了間際になって満開という皮肉な

結果になってしまった。自然は人間の都合通りにはなかなか合わせてはくれないのだ。しかし、里は昨年以上の来場者で、延べ人数が約五千人にのぼり、昨年の約一、五倍に増えた。これは山百合の群落の素晴らしさと見学終了後のお茶や蒸かしたジャガイモなど里ならではのおもてなしが口コミで広まったことと、テレビ、ラジオなどメディア報道で宣伝してくれたおかげだと思ふ。

さて、この山百合の里は、山のオーナーである関野謙一氏が今から三十八年前、二十代の頃から山を管理して育て上げたものだ。以前は関野氏の祖父が山を手入れしており、その後関野氏が引継いだのだそう。

その昔、祖父の時代は、里山は生活のための糧として大いに利用された。山の木は薪や炭やシイタケの原木などに使った。しかし、その祖父も年老いて体もいうことをきかなくなり、手に負えなくなった山は荒れ果ててしまった。

ある時、山に白く美しく揺れる大輪の花を見つけた関野氏は思ったのだそう。「この美しい花を多くの人に見ていただくよう！」と。それからというもの、山百合の里づくりのため、雨の日も風の日も仕事の合間に、下草刈に励んだ。その頃はまだ若かった関野氏のことを、近所の人達は変人呼ばわりしていた。何時の世でも先陣を切る開拓者は変わり者扱いされるものだ。

それから二十八年が過ぎた頃に、群落する山百合に魅せられた人々がボランティアとして山の管理に協力し、現在二万本以上咲く山百合の里が誕生したのだ。

私は、この里山が地球の縮図として、生きとし生けるものすべてが共存でき環境のモデルになるように願う、「山百合の里」の詩を書き、曲を作った。

『山百合の里』

一、里山に吹く風に ゆれる山百合
ホタルブクロもノアザミも みんなゆれる
里山に吹く風に ゆれる山百合
トンボもチョウチョもホタルも みんなゆれる
昔おじいちゃんが 植えた山百合
今は幾千万の山百合の里
里山に吹く風に ゆれる山百合
セミもカエルも里人も みんなゆれる

二、里山に吹く風に 香る山百合
ホタルブクロもノアザミも みんな香る
里山に吹く風に 香る山百合
トンボもチョウチョもホタルも みんな香る
昔夢にえがいた山百合の里
今ははなのおまつりにぎわいの里
風にゆれる命ふるさとの花
甘いこの香は永遠(とわ)につづく
里山に吹く風に 香る山百合
セミもカエルも里人も

野口さんの作られた山百合の里の歌は、唄いやすく
童心に帰らせてくれます。

野口さんのコンサートがあった七月二十日は、私も山百合の里に出かけてきた。谷津の青田に響くオカリナの歌

声は、里山の自然の風になっていった。
山百合の里の歌が、夏の里山に矢合唱の風となって木々を揺らし、甘い香を里の山のいっばいに流れてあふれさせてくれたらと願っています。

谷津の青田に山百合の香を求めて 揺れるふさと (ひまわり)

鹿島と「悪路王」 近藤治平

山や滝の話が続いたので、次は霞ヶ浦に舞い物語の題材を求めてみよう、六月の公演では、行方市の三味塚古墳をモチーフに、異説三味塚恋歌を書いてみた。この時に霞ヶ浦沿岸の歴史を浅くではあるが訪ねてみたところ、霞ヶ浦沿岸は、最初に人の住み着いた地に相応しく、物語の題材となるネタの実に沢山あることを知った。

三味塚古墳の異説では、建借間命、黒坂命を侵略者として本来の原住日本民族(蝦夷)にスポットを当てて物語を書下ろした。この時、資料を眺めていて、とても興味が惹かれたのは鹿島郡、鹿島神宮の表記であった。

常陸国風土記には香島とあるが、何故かそれは風土記にだけで、あとは全て「鹿島」の字が当てられている。常陸国風土記に書かれている香島であれば、鹿島神宮は香島神宮でなければならぬはずである。地名などの表記は好き字を着けて構わないことになっていた、カシマを表記する漢字は香島でも構わなかったのであるが、香島にはならなかった。

何となく物語の臭いがした。それで、少し調べを

進めてみたら、大和民族なる侵略者が来るまでは、その地は「シカシマ・カムイ」のおわす所であったという説に出会ってしまった。

なるほど、それで物語の臭いがしたのかと思いき、もう少し資料を眺めていたら、鹿島神宮に「悪路王」と称される蝦夷の頭目と伝えられる男の首の木像が奉納され、宝物館に展示されてあるということを知った。さらに、その「悪路王」なる人物の首の木像は、桂村・高久の鹿島神社にも社宝として安置されているのだという。

悪路王は、坂上田村麻呂と戦って敗れた蝦夷の長「アテルイ」とも言われているが、確かな事はわかっていない。田村麻呂に敗れたアテルイだとすると、アテルイは京に連行され、八〇二年に河内で斬殺されたと記録されているのであるが、それが果して悪路王なのかはわからない。悪路王は、謡曲にも登場し、そこでは阿黒王となっている。

また一説には、悪路王は大和系の漂着民族と思われるオロチオン族の首領で、悪路の主(おろのぬし)とも言われている。

悪路王の実態は定かではないのであるが、大和民族の敵であることには違いないのである。その大和民族の敵である者の頭彫が何故、鹿島の神に奉納されたのか不思議であり、面白いところである。

鹿島神宮の祭神は、武の神である武甕槌命(たけみかずちのみこと)であり、蝦夷征伐に向う者達が遙拝したり参拝に訪れたりした。それで、その戦勝報告として奉納されたということに、一応はなっているようである。特に、桂村高久の鹿島神社の頭彫は、始めは塩漬けの生首であったが、後に木彫に変

わったともいわれている。木彫に使われている頭髪は、人のものだという。

しかし、高久の鹿島神社にある悪路王の首像は、人形浄瑠璃か屋台のからくりに使われたものらしく、裏側がくり抜かれており、眼球が上下に動き、表情を作る仕組みになっている。どうやら、謡曲の阿黒王の人形芝居にでも使われたものと思われる。

さて、悪路王の歴史の実証については、さほど興味のあるものではないが、舞い物語として、蝦夷の勇壮な首領の恋物語が想像できれば、縄文人鬣貞の私には愉快この上もない。

そんなわけで今「乙音(おとね)」と悪路狼夢(おろろん)なる勝手な物語を捏造している最中である。

悪路王の本名は悪路狼夢(おろろん)。

オロロンの恋人「乙音(おとね)」は、蝦夷征伐に向うため鹿島神宮に戦勝祈願に来た大和の荒くれどもに犯され、命を絶ってしまった。

奈女比古と比愛の血を引く、オロロンの怒りは、三日三晩、鹿島が浦(霞ヶ浦)の高波となって荒れ狂わせた。

鹿島が浦の波が静まった時オロロンは、大和の侵略者達と混血し、誇り高き蝦夷を忘れていく行方之地を捨て、奥州の蝦夷に合流し大和と戦うことにした。

数頭の行方馬を駆って、黒坂命、建借間命の軍勢を一人で蹴散らした奈女比古の血を受け継いだオロロンの戦力(いくさちから)は、大和の兵士達から恐れられた。

オロロンは何時しか奥州の蝦夷の頭目となった。オロロンの率いる蝦夷の軍は大和の兵を押し返し、

岩手県南部の田谷窟(たつこくのいわや)に塞を築き、その勇姿を誇った。

しかし、坂上田村麻呂を征夷大將軍とした討伐軍との戦いで、大勢の犠牲者が出ることをよしとしないオロロンは、民を救うために坂上田村麻呂に自ら降伏した。敵ながら天晴れな武將ぶりと、その男気に田村麻呂がほれ込み、都に連れて行き助命を嘆願したが許されず、斬殺された。その時に、悪路王は、田村麻呂に、自分が死んだら、わが民族の守護神である天の神「シカシマカムイ」の杜にわが御魂を帰してくれと願う。しかしそれは、悪路王の愛した蝦夷の舞い娘「乙音」の眠る鹿島の森に帰ることであった。

田村麻呂は、悪路王の首を密かに桂村の高久の鹿島神社に安置し、時を図って鹿島神宮に祀ることを考えた。しかし、悪路王の首は、鹿島神宮に祀られることはなかった。

時代は下がり、江戸時代前期の寛文四年のことであった。奥州の藤原満清という人物が、鹿島神宮に「悪路王の首像」と称し奉納された。藤原満清とはどのような人物なのか全く分かっていない。しかし、影の説、影の異説、裏物語の捏造が大好きな小生にとって、これは正に舞い物語への強烈なモチベーションになり得るものであった。

藤原満清、彼は、何を隠そう悪路王の子孫であった。オロロンが亡くなっておよそ八〇〇年後、既にオロロンの顔も想像にしか判らない中で、満清は、己の顔を模して彫らせた首像を鹿島神宮に奉納したのであった。

藤原一族は、古代東北地方を平定した中心勢力で

あったが、蝦夷の反抗には再三手を焼いていた。そんな時、藤原の娘「道子」が、頭角を現す前のオロロンに助けられたことがあった。それが縁で、まだ傷心のオロロンを道子が慰めたのであった。

道子に心を癒されたオロロンは、蝦夷の首領となったときに、都から来た坂上田村麻呂の類まれなる戦力を知り、これ以上の双方の犠牲を出す意味のないと、降伏したのであった。

田村麻呂は、オロロンの武將として、一族の首長としての技量と男気にほれ込み、都につれて、助命を嘆願したのであったが、許されず斬殺となってしまった。オロロンの降伏の直接の原因となったのは道子に我が子が宿ったことであった。

オロロンが打ち首になった後、道子は子を生み、女手一つに育てた。満清はその子孫であった。満清は、オロロンの首像を鹿島神宮に奉納すると、その足で蝦夷地に渡ったと影にいわれているが、その影の伝えは、小生の捏造である。

十月の公演では、このオロロンをモチーフにして、「乙音の舞い」「オロロン怒りの舞い&戦の舞い」「道子の紬の舞い」を配した「新説悪路王」を演じてみようと思っている。

しかし、この常世の国には、実に多くの物語のネタの眠っていることだろうかと驚嘆させられる。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

Tel 0299-24-2063

(白井啓治方)